

先日登った若狭駒ヶ岳の麓の村落が“木地山”という地名で、少し行った処が木地山峠、そこを乗り越えると小浜へ行けるかなと思える昔の街道、バス停付近に“獣魂碑”と書かれた石碑が在り、気持ちがしんみりしたが嬉しくもなる。

木地という言葉は知っていた、木で作られた生活食器、食器の形に削られた木、削った木のままで使用する事もあるが、絵でいえばキャンバス、ほとんどが彩色され、高級食器などは漆で何十回も塗られ磨かれ大事に使われている、そういう製品の木を削る作業、木その物、食器制作の一工程と理解していた。木地師というのは横向きの轆轤に材木の塊を差し込んで回転しながら削っていく、加工しながら形を作っていく作業をする人と思っていた。最近では金属加工も同じような方法で卓越した神の手を持つ職人が微妙な金属加工をしている映像もよく見る。木地師とは轆轤だけを使う人なのか、箸、櫛、スプーンというような木製品が木地と呼ぶのかどうかは知らないが、木で作られたそれらの製品は温かみがありいいものだと思っていた。

<木地師は惟喬親王を祖と仰ぎ、近江国愛知郡小椋庄に住む木地師一門を本家とし、地方に散在する木地師すべてを分家とし、君ヶ畑の大皇器地祖神社か蛭谷の筒井神社のどちらかに氏子として所属していました。明治までは木地師は全国のどここの山に入っても良く、山の8合目以上の木は切っても良いという許可を得ていました。彼らは近江國小椋村の君ヶ畑、蛭谷を原籍地として、ジプシーのように全国の山を20~30年ごとに移動しながら生活をしていました。>

これは知らなかった、君ヶ畑は何度も通っている、御池岳に向かう時に何度も通った。“木地師の里”という看板も何度か見た、それほど大層な物だったのかと改めて驚くと同時に、ほとんど人影も見られず侘びしい山深い村だと思っていた。ネットを覗いてみると「山の子とは遊んではいけない」「山の子と農村の子との悲恋物語」「山の民」という言葉が出てくる、こんな処にも区別、差別が在ったのかと腹立たしくも悲しくなる。

○清掃という作業:掃除をする、片付ける、綺麗にする。

人やら動物の死体、ゴミ、要らなくなった建築土木から生活必需品、雑器の片付け。

○物を作るという作業:建築土木から生活必需品、雑器、兵器製造まで。工芸品、芸術作品もある。

○歌舞音曲という作業:芸術芸能の世界、ただ文学の世界は貴族もしていたようだが。TVに写っている全てかも。

これらの世界は、こういう作業に従事する人たちは、日本だけでなくアジアでも古い時代から区別、差別されていたが、これらの作業は人が生きていく上でなくてはならない作業、無くてはならない人たちだ。それらの作業をしたくは無いが仕方なくしていたのか、強制的にさせられていたのか、それとも、これは自分の作業、喜んでする作業、これは自分たちだけの作業と権利意識さえ燃やしてしていた作業なのか、個々の人たちの事はわからないが、喜んで楽しく作業をして欲しい、オレならそのようにする。どのような作業仕事にせよ、その作業仕事の人々から必要とされ盛んになり、華々しい世界、文化として花開けばそんなところに区別差別と言っている場合ではない、それこそ地位や名誉や金銭が舞い込み人から羨ましがられるようになる。

<室町時代は暗黒時代ではなく、日本のルネッサンスともいべき文化活動の活発な時代だと云われている。能、歌舞伎、建築や庭など現代の日本文化の大部分は室町文化に源流があり、また社会関係や風習の大部分も、室町時代に起源を求めることができる。南北朝内乱と、応仁の乱にはじまる戦国時代が近世・近代の日本を創ったのである。それは人々が古代以来の隷属から解放され、自由闊達に文化活動ができたからである。>

この先生は書いている、宮廷や幕府やらの支配階級以外の処、大勢の庶民が起こした文化、身分も地位もない大衆の叫びやうねりが今までの物と融合昇華して、次々と新しい物、素晴らしい物が生まれて来たのかもしれない。

ところで自身を振り返って、山が好き、山に登っているとはいうが、山に住む、山で暮らすということとはできない、平地の方がいい、時々訪れさせてもらうのがいい、と勝手な事を言って失礼します。山は雨が多い湿度が高い「午後には雲が湧き上がるので早めに小屋に入ろう」というのが合言葉になっているぐらい、雨に霧に雲が多い。なので流れる川も安定しない、川が枯れることはまずないが、洪水、鉄砲水、それによる山崩れ、土砂崩れはよくある。気温も平地に比べて低い、1000メートル上があれば6度C下がる、風も強い、雪も降る、人が少ないので淋しい、子どもが生まれたら教育やら医療やらに困る、というような条件を、山に住む昔の人たちは克服してきたのだ。その分、自然環境は抜群にいい、山の幸も手に入ると悪いことばかりではない。山には住めないなんて言っている情けないオレですが、時々お邪魔させて下さい、頼みます。

歩いていると左側の笹の藪から「ガサガサ」と獣が駆け去る足音に驚かされ、慌てて走り去る先に目をやるとちらっと真っ黒い背中、中型の犬ぐらいの大きさだけれどその毛色は真っ黒、「熊の子どもかな」と意気を奮めて消え去った方向を見つめたが何も見えない。「毛の黒い鹿もいるよ」「黒い鹿、聞いたこと無いよ」「カモシカも背中黒いよ」「カモシカの毛は黒に近いグレー、黒と黒に近いグレーとの違いはわかるよ」「カモシカは逃げないよ、いつもこちらをじっと見つめているから」

今回の山は今年何回目かの八ヶ岳。横岳ロープウェイに朝集合、1774メートルの下の駅から2240メートルの山頂駅まで標高差500メートル足らずを往復1800円の運賃、9分間で行ってくれる。この500メートルを歩いて登れば1時間2時間はゆうにかかってしまう、荷が重い時には有難い限りだ。「山登りなのにロープウェイに乗るとは・・・」と指弾する方も居られるかもしれないが、いきなり標高2000メートルに立てたら後の行動が楽なのですよという事でお許しを。

休日なのでたくさんの人と共にロープウェイの山頂駅を外に出ると“坪庭”と書かれている、広々とした山の上、ゴロゴロ散らばった大きな火山弾が素晴らしい景観を作っている、禅寺の庭を思わせる広い佇（たたず）まいが何故“坪庭”なのかはわからない。京都の街屋の畳一、二枚ぐらいの大きさの庭を“坪庭”と呼ぶらしいけれどここは広大な平らかないい庭の風景だ、軽やかに善男善女が笑いながら話しながら楽しんでいる、普通の恰好で普通の靴で1.2時間は散策できる素晴らしい観光地ですぞと観光案内に一役。西穂高のロープウェイの山頂駅はすぐに登山道で10分20分歩くと行き止まり、ここから先は登山の装備がないといけませんと書いてある。木曾駒ヶ岳も普通の靴では遠くまで歩けないね。

北横岳の登りは少しきつい、善男善女はここまでは登ってこないがすぐにてっぺんになる、廻りは山また山、麓に人家も見える、少し下った辺りのカラマツが山を黄色に染めている、黄金（こがね）色の山並みがうねっている。池がたくさん在って、しかも総ての池が綺麗、まわりの緑とあいまって庭園になっている、北横岳から見下ろせる処に池が、次に大岳に行くとまたなかなかのいい池が在った。

北横岳から双子池までの道は歩きにくい、大きな岩がごろごろある道で、重い荷を担いで歩くのにはこずった、苦手な登山道だ、滑ったりころんだりしたら、少々怪我ではすまない、テント泊の大きな荷を背負って一步一步を慎重に歩く。雨の予報だったが空を見上げれば時々陽も差し今日一日は天気が持ちそうだ。

仲間とは双子池で別れ、ここでテント泊、時間がまだまだ早いので双子山まで散策。双子山のてっぺんは広々と枯草がたなびくならかな背中、夕方が近づく少し暗くなりかけてきている、空模様もおかしくなりかけている、向こうの山が墨絵の世界のようにモノクロトーンで重なっている、此処にも火山弾が所々にある、お地藏さんが在る、石の小さい祠が在る、お地藏さんは大岳にも在った、双子池にも在った。テント場に「飲料水は雌池の水を使って下さい、洗い物は雄池の水を使って下さい」と書いてある「そのまま飲めそうぐらいにきれいな水だが、沸かさないとやばいよね」と独り言。とこれを書きながら「さてよ、オレは、酔って水の補給に1リットルのボトルで水を汲んでいたのを思い出し、それを飲んでいただけでは、いや、確かに旨い、持ってきていた水道水と勘違いをして飲んでいた？あの水は、旨い水だと思いながら・・・」そのうち腹に虫でも湧くかな、いやだねえ。雨が降ってきたがテントの前を空けて持参のおかずをウイスキーをチビリ、真っ暗な空の水面はやや明るいけれど、森の中木の中は真っ暗闇、ピューンと鹿の鳴き声。

翌日は9:30に山頂駅集合なので7時に出発、崖崩れで林道が通行止めに気付かず2時間のロス、双子池に戻って亀甲池から北横岳のコース、食料が減って荷も軽くなって喜んでいただけの予定時間を大幅に遅れそうと、気は焦る荷は食いこんでく北横岳への登りはなかなかの急登が1時間以上続く、ハアハアゼイゼイと予定より2時間半の遅刻、山頂駅荷は皆さん見当たらずロープウェイで下に降りたら待っていてくれた、感謝。

松本道介著<反学問のすすめ>

先生、面白い事を書いている、こんな事を言う先生が居るのだ、ご自分では、「勉強嫌い」「気の弱い人間だ」「自身がない」「喧嘩も、議論を闘わせた事もない」「会議で反対意見など主張した事がない」と言いつつ、大胆で皮肉な話がどんどん出てくる、世の碩学、偉人と雖もバツサリ切っていく、面白い本を見つけた、面白いおっさんが居るとほくそ笑んでいる。先日もこの人の本の中から、原子力とは何か、何故に人々が反原発と叫ぶのかがわかった。「あれはこの世の物ではない」という言葉から、核というものがこの世の物でない、宇宙にあるもので地球には無いものだ、地球にはやってこない、地球には屋根というか天井が在って核はやってこないという事が理解できた。知っている人にとっては「今頃何を言っているのかね」と苦笑される話かもしれないが、理解してなかったオレにとっては「原発反対、核反対」これは身体にはよくない事なんだろうと肌で感じてはいたが、何がどう良くない、何をどうすればいい、というような事が、わからなかった事が、“目からうろこが落ちる”の諺(ではなく新約聖書だっ)の如くわかった。人類は核を作り扱えるが、ブレーキをかけたり後始末をする技術がまだ無いという事らしい。

<私は元来喧嘩は無論の事、議論を闘わせ事さえ嫌いな人間である。権威に楯着く事も好まない人間である。その私が何故反権威的、反時代的文章を書いたのか(略)私の文章はごく少数の方から深い共感を披瀝される以外、反論や批判は全くなく、大方無視され続けている。(略)一人の方から一つの思想的立場を表明するだけでなく、ご自分の立場を表明してほしいという質問ではなく注文が来た。(略)長年大学で論文や評論を書いて来たのだから思想が無いはずがないと言われるが、私には思想はない。(略)私は思想を持つ人や、人の思想を受け売りする人に、素朴な疑問を呈してきた。>

オレは今まで、思想は大事だ、「想い考え」「オレを想い、お前を想い」「今を想い、次を想い」なんて思っていたけれど、先生の話聞くに及んで、普通に生きて普通に笑って淡々と生きればいいのかと、不思議と背の荷が軽くなる。この先生「思想なんてないよ」「思想を持っている人、賢人の思想を解説する人、その思想を講義する人に、それ思想？思想が必要？」と言っている、ばっさり大上段から切り込んでいる。

<明治以降ありとあらゆる舶来品が輸入された。舶来品のほとんどが古来の日本にも存在した。衣装、家具、装飾品から絵画、音楽、詩歌、演劇全て同種の物が日本にも伝統が在ったし、それなりに優れた国産品もあった。ただひとつ“思想”だけは存在しなかった。難解で作りも堅牢な“哲学”なるものは全く存在しなかった。同種の物も日本にはなかったため、西周(あまね)はまったく新造語として哲学という言葉当てた。古来の日本には哲学も思想もなかった。それでいて江戸時代の250年間日本は世界でももっとも平和な、世界で最も美しい国家であり続けた。現在の地球にあって最も重要な思想であるはずのエコロジーに於いて、最も進んだ国であった。それでいてエコロジーの思想とか、リサイクルの思想とか、それに類するものは全く存在しなかったし、むしろ思想などなかったおかげで、エコロジーやリサイクルが上手く行っていた観さえある。

近代思想、哲学の祖デカルトは「我考える、故に我あり」というのがごく単純に傲慢不遜な言葉だと感じる。「俺が居るから考えるに決まっているじゃねえか、居なきゃ考えるわけがねえ」と啖呵を切ってみたい。>

先生の話、日本の事、戦争の事と次から次に出てくる、オレのぼやきどころではなく堂々と展開していく。心地いい。

先日来報道で、高級ホテルや高級料亭の食事メニューの誤表示、偽装でもめている。「あんたの店は〇〇エビとメニューに書いていながら、違うエビを使っている、これは偽装ではないのか」と記者の舌鋒鋭い。報道機関は悪い事をした権威、店舗、企業に対して、お前が悪い、という言葉は日々練習を積んでいるように上手く表現する。誰かが今の日本は「批判する文化」「つぶす文化」が横行していると言っていたが、オレもそう思う。いくら高級な飯屋でも毎日同じ材料が入るわけがない、毎日同じ味なわけがない、皆さん旨いと言って食ってたはず、それでいいじゃないのかねとオレは思うが、先生ならこの話なんていうかねえ。

2日前アトリエで久しぶりの飲み会で10人ぐらい集まった。オレが平均年齢の真中ぐらいかという年齢層、若い奴も来てくれないかなあ、歓迎しますよ、指導なんてしませんよ、話を聞かせてもらいますよ。図版はアトリエ風景。

例年、年末が近付くと、壁にぶら下がっているカレンダーが残りが2枚1枚と薄っぺらになって来て、次の月その次の月、すなわち1月2月3月の予定を書き込む処が無いと困っていた。オレは何時も予定の全てを壁に吊ったカレンダーに書き込むようにしている「これは大事」というものは“何時”“何処で”“何用”という事を書き込んである。これを書かないと一時間もすれば忘れ去ってしまう、果ては大失態、大恥をかく。「大事ではない、これは却下」と決めた時点でその事は書き込まない、同じように一時間もすれば忘れてしまう、無論その当日が来てても何が在ったかさえ忘れてしまっているので無関心ですませてしまう。それはそれでよしと思って過ごしている。話を元に戻して1月2月3月のカレンダーはやむなくパソコンで検索して1月2月3月のカレンダーを探し出してプリントアウトしたカレンダーに次の予定を書き込んでいる。

カレンダーは日曜日始まりの物ばかりだと思っていた、世間には月曜日始まりの物もあるのを知った、月曜日始まりの物が当然のように在るが、これは敬遠している、見ないようにしている。ずっと昔から日曜日始まりのカレンダーを見慣れているので、月曜日始まりの物を見せられると、いわゆる“感が狂う”のである。

二、三年前にカレンダーの事で冷や汗をかいた事が在った。「土曜日に出発、一泊予定で出かけよう」「おお、空いているので了解です」と返事をし「OO日には出発だよ」と何度も確認し合っていたが、ある日カレンダーを覗きながら愕然とした「日曜日に予定が書き込んである」「土曜日に出発と書いてある」日曜日には半年も前から大事な予定を書き込んでいた、あとからその前日の土曜日に出発と書き込んだ。土曜日出発で泊まりなら“土曜日と日曜日”の二日間が必要なのにカレンダーに書かれた日曜日を無視している、次の行を見誤っている、ボケている、考えられないような初歩的なミス、というより、幼稚すぎる“ポカ”をやってしまった事があった、平謝りで収めた。

廻りの知人を見ていると、ほとんどの方が小型の手帳カレンダーに次々予定を書き込んでいるのをよく見かる「オレもやってみよう」と買ったものやら手造りやらを何度か持ったが、三日坊主の謂れ通りに2,3行書いただけであとは書かなくなってしまうという体たらくだ。恐らく最近では携帯電話にカレンダー機能が付きそこに書き込んでいる人も多くなって来ているだろう、携帯もパソコンも相互に書き込めて出先でも「O日に決めていいですか」なんて言われても画面をみて「OKです」とその場で予定を書き込めて、しかもパソコンにもその予定が、同じ情報が自動的に書き込めるのは便利その物だ。携帯もない、手帳もないオレは「帰って調べて確認電話入れます」などと前近代的な事をいつも言っている。ときには、帰って壁のカレンダーを見て「えらい事だ、予定が入っている」と慌てて約束の取り消し連絡で謝った事も何度かあった。

先日「室町時代は暗黒の時代と言われているが、文化が花開いた時代でもある」という事を読んで“室町時代”とは、そう急に言われても遙か少年時代に学校で習ったきりだと調べてみた。360年も続いた平安時代、794年に京都に遷都があり、天皇家、藤原家、平家・源氏の武士の時代。1185年源頼朝が鎌倉に、北条氏に実権が移って足利家に滅ぼされ、150年ぐらい続いた鎌倉幕府が足利尊氏の登場で終わった。“室町時代”は足利尊氏が京都に幕府を構え征夷大將軍となって以降15代続いた230年ぐらいの間だが“南北朝時代”“戦国時代”と分ける人もいるとか。織田信長が足利幕府を滅ぼし安土桃山時代に移ると、この様に活字にしたら多少は薄くなったオレの脳の壁に刻まれるだろう。室町時代を調べるために時代・年代を調べるうちに、その中にカレンダーの項目があり、それにぶつかってしまって今日の話になったわけです。ただオレが関心を持っているのは時代を収めた英雄たちの話ではなく、人・人の流れ・人の造った物・などですが、今日はこの話は次回にまわします。

カレンダーの事でもうひとつ面白い事が載っていた。今の太陽暦で作られている現行のカレンダーは至極短銃な物で14通りの暦があれば未来永劫使用できるというのだ。元日が何曜日に当たるかで7通り、それぞれの閏年の場合があるので7通り、その合計14通りの暦があればそれでいい。例えば2001年のカレンダーは6年後の2007年に使用できる、さらに11年後の2018年、2029年、2036年、というように平年のカレンダーは6,11,11,6,11,11,6...の周期で繰り返し使用される。閏年の場合でも28年周期で同じカレンダーが使われる。たとえば2004年のカレンダーは2032年に再利用できる。と書かれている物を見て啞然と口をポカリと開けながら「そういうことか」化かされた様な気分だけれど、知っている人にとれば、至極常識の話かもしれない。

図版はデッサン。最近このような絵を夢中に描いている。

歴史は好きにならずにおきましょう、オレの回りには歴史が好きで男の人がたくさん居られるので、今さら好きにならずにおきましょうと思っている。皆さん私は何時の時代、私は何処の場所と歴史好きでもそれぞれ違うようだけれど、「あまり詳しくはないのだけれど」と前置きしながら話し始めると止まらない。カンちゃんは 60 歳代から大学の聴講生にまでなって古墳時代の事を考えている。先日亡くなったテルちゃんは住居のある茨木市を中心に戦国時代や江戸時代を調べていたようだ。歴史の話はその時代に活躍した人物、その時代の街とそこに住んでいた人々、その時代のその場所と余所の場所との関係等が色々絡み合っている。人の系列、場所の系列、場所と場所の系列、そこに時間が流れ、昨日の話と今日に話と明日の話はどんどん変化していく様はめぐるましく「それが面白いんだよ」とニタリ顔の先生たちに対してオレの脳が虚しくも空々しい。読んでいる本にこういう事が書いてある。年貢の取り立て人を派遣した京都の大寺院、その取り立て人が地方に派遣され地方の現場で手腕を発揮して安定的に年貢が納められるようになってきた、と何ページにも渡って記述されている。それはめでたしとそれで終わりかと思ったら、その取り立て人が徐々にその年貢の一部を自分の物にしだした、そのことがいくつもの古文書に残されている。罷免だ、連行するぞ、というには時が遅すぎ取り立て人はその地方の物なりつつある。その地方の力のある輩、豪族がそれぞれ戦って勝ち進んでいくが、もう年貢は京都には行かなくなっている。京都の一寺院の年貢の事が事細かに文章で残されていて、それを調べているうちにあちらこちらに住む人や、あちらこちらの場所の事情や、物の流れやらが手に取るように分かってくるだろうけれど、これには近づきまい、なんだか魅力的過ぎるが、これはやめておこう。

貴族達、大寺院、大神社、武家の棟梁は日本各地に荘園という田畑を持っていた。その上がりである“年貢”を「納めろ」という形で掠め取って贅沢な生計を立てていたのだ。臍げにわかっていたはずのこのシステムを今さらながらに突き付けられて、これはいかん、これは単なる独裁の仕組み、歴史の中で貴族達、大寺院、大神社、武家の棟梁と華々しく持て囃していたけれど、こいつらは「民のダニじゃないのかね」とあの華々しさが単なる悪人に見えてオレの中で価値観の急変。

そういう考えから出発して「室町時代は暗黒の時代、長く続いたけれど、華々しい人物は、足利尊氏から十五代の征夷大將軍と、それに対抗した、南北朝の、後鳥羽上皇のぐらい」なんて少し読んで中学生時代を思い出してきた。これでは大河ドラマにはならないと取り上げないから暗黒時代というのかもしれないね。

日本にも歴史の残る英雄・豪傑が何人もいて、人はその人物の物語に酔い、大河ドラマに喝采を送るけれど、これがいけないんだね、英雄豪傑という輩の裏を返せば、独裁者で冷血な利己主義者、自分の体制を堅固にする事だけ、自分の栄耀栄華を極める事だけ、それらが進むと一層華々しくなるがその反対側に居る一般大衆はたまったものではない。オレも今まで英雄・豪傑に喝采を送っていた一人だと思ふと恥ずかしい限り。

地方には領主、代官、地頭やらの責任者が居て彼らは民からの年貢の“取り立て・集計・配送”を仕事にしていた、中央から任命されていた。その仕組みが少しずつ崩れていった。生産する人間が「やってられない、我々は田畑から離れ余所へいく」といいます。取り立て人達の上下関係、力関係が崩れ「お前の利権はもらった」「今日から俺が主人でお前は家来だ、命だけは助けてやる」というような事が起こった、これを下剋上というと、中学生の頃習った懐かしい言葉が出てくる。中央から任命されていた人物たちが武力による力をつけ「ばかばかしい、なんであいつらに差し出さなければならぬ」こんなふうな秩序が崩れていく時代、義事、義典が守られない時代、力、富を持つ人間がころころ変わっていく時代、一般大衆がものいい、少しでも自由を手に入れた時代、こんな時代に文化の芽が出てくるらしい。

堺や博多では自治的な都市運営がなされていた。

一向宗の寺院を中心とした寺院、摂津石山(現大阪城)、越前、富田林での自治

街道が整備され、廻船を用いる輸送が始まる

公家の北山文化に対し東山文化が「侘び寂び」の精神で、茶の湯、能楽、書院造建築、連歌、水墨画、狩野派等が盛んになる。

今日は中学時代の社会のお勉強の復習でした。

図版は安威川での檻褸くん。安威川も室町時代は 2,3 キロも流れたら海か湿地帯かな。今は海まで 20 キロぐらいか。

家並みが無くなり、しばらく走るとまた十軒ぐらゐの集落、過疎の村、廃屋もちらほら。滋賀県の湖東の方も琵琶湖から何キロか離れた地域にこういう過疎の村がある、何度かその付近の山に向かった時に、先日まで暮らしていたような雰囲気の家から、屋根も壁もなくわずかな柱と基礎だけが残って、風呂や便所のタイルだけが生々しい家をいくつも見ているので驚かないが、湖西のこの辺り、もうすぐ福井県という山の中、分水嶺の場所はだんだん人が住ま無くなってきているのだろう。昔は人が通るだけの道しか無く、歩くか牛馬に頼るか、ほとんどの人がその地で過ごし暮らし生涯を終えた、とはいえそれこそが人間が生きる生き方の原点かもしれない「文化文明くそくらえ」と中途半端なオレの余迷言かな。秋の日のもう落ち葉が舞い散る晩秋の頃、朝日がキラリと光り、掬って飲めそうな綺麗な水が流れる。家々は昔の造り、三角屋根の上に未だに藁葺き屋根の家がちらほら、他の家はその藁葺きの上をトタン板で囲っている。“藁葺き”と子どもの頃から呼んでいた、鳥飼村の昔ながらの家々では稲藁か麦藁をせっせとほり上げ、たくさんの男が屋根を葺いていたのを見たような気がする「茅ではないの」と疑問符が湧くが調べてみると、“藁葺き”は稲か麦の藁(わら)で葺くもの、茅葺きは茅(かや:すすき)で葺くもの、未だに寺社建築にも使われ耐久性に優れるとか。

ゆっくりと車は進み徐々に高度も上がってトイレのある処が終点、そこにはもう4,5台の車が停まっている。「着替えよう」と車からリュックと靴を出し地面に腰を降ろす、まずは靴下を脱ぎ、厚手の靴下に履き替え、登山靴を履く。雨や雪の場合は雨具のズボンを先に履く、雪の場合は靴の上からスパッツを着る、靴の中に雪が入って解けて水浸しという不快な事になるのを防ぐためだ。今日は一日雨も降りそうにない、少し暖かさを感じる穏やかな日差しだ。先日マラソンコーチが靴の紐の結び方を伝授「靴が途中で脱げたら大変なので紐の結び方に要注意、いったん固く結んでその余りを紐の下に押し込んで、もう一度固く結ぶと完璧」と教わったので、コーチのいうとおりにすると最近途中で紐を結び直すこともなくなった。9時に出発。登り始めたらいきなり急登、木の根が土の上に出ている、昨夜雨が降ったようで地面がぐちゃっと濡れている状態で歩きにくい。どんどん高度を稼ぐが、毎年の体力低下は否めない、ハアハアと息も荒い。この辺りの山は、山が明るい、綺麗だ、気持ちがいいいつも思う。それは植林された杉や檜が少なく、ほとんどが落葉広葉樹林帯、と難しい言い回しは間違っているかもしれないので、いい直すと自然林の山、今は秋の落葉シーズンで空がまる見え、陽もホワリと地面や幹を照らすので清々しい。1000メートルにも満たない低い山々だけれど、上の方には道路もない、人もほとんど居ない、鹿のなく声がしきり、糞もあちこちで臭う、恐らく熊も居るのだろうけれど、それらしい糞も熊棚も見当たらない。2時間ぐらゐで一つのピーク、そこから尾根道を歩く、遠くの方に琵琶湖らしき水面が見える、反対側には日本海が見られるのだろうけれど今日は霞んで見えない。

朝はよく腹が減る「また食べているね」とよく言われるが、休憩で止まり一本取る時にはリュックを空けて“パン”次の休憩で“おにぎり”そして“パン”と次々腹に入れていく。水も飲んだ、冬に近いこの時期は夏に比べると水の量が半分も要らないけれど、もう500mmのボトルが空になっている。ブナ、榎、檜、石楠花と知っているだけの木の名前を並べてみたがまだまだ沢山の種類の木が、細い物から太い物までたくさん在るが、まずブナが美しい堂々としている、青い空に突き刺さっている。この木の実は何だろうと上を見上げたらお馴染みの天狗の団扇状の葉っぱ、今はほとんど枯れてはいるがその形から「榎の木だ」とその太さ堂々さに感激。帰り道は小川沿い、谷筋を歩いた。登山靴なので何度も右へ左へ渡らなければならない川を、上手く石を探してその上を「ぴょんぴょん」と若々しくは飛べず「よっこらしょ」と左右の足。此処は簡単「ひとつ飛び」と泥溜まりを跨いで枝を掴んだら「ぼきり」「ざぶん」水の中に足が浸かり尻まで少し浸かってしまった。「くそお」と後は怖いものなし、川の中を、水の流れをジャブジャブ心地よいが靴の中は泥水だらけ、もう1,2時間で車に帰り着くと思うとそれもまたよし。山の途中で靴が濡れると嫌な物で、石を渡っていかなければならない処や、渡渉の処は靴を脱いで裸足で渡るようにしている。翌日に濡れた靴を履いての山行はおぞましい限り。

此処は昔は人々が往来した街道、今は登山道だけれど、人が行き交った生活の道なのであちらこちらに祠がある。昔の人はこんな石ころだらけの登山道を草鞋ひとつでよくも歩けたものだと感心しきり。

車に帰って靴を脱ぎ靴下を脱いだ。ズボンの濡れは何とか許せそうと言ってもズボンの予備は無いので、そのまま履いておくしかない、この程度なら雨に濡れ、泥で汚れるよりはましだと運動靴に履き替えシャツを脱ぎ着替えのシャツに防寒具、水をグビりと飲んで食事の用意。野菜と鶏肉の中華風鍋。ビールにワイン。コンロに火を付け、まずはビールで乾杯「いい山でした」夜が更け星が煌めく、空気が綺麗なこの辺りの夜空はまだまだすごい、と陶酔の時間が過ぎて行った。

山の朝は、霧（きり）というのか、雲というのか、霞（かすみ）というのか、山と山の間に白い霧（もや）がフワリフワリ、そのまた向こうにもフワリフワリ、大気は水気をたっぷり含んでいる。昨夜は寝袋に潜り込みジッパーを絞め酔いに身体を預け瞬く間に眠りに付いた。寝ている時にかなり激しく降る雨の音で目覚めたがすぐまた寝入ってしまった。普段なら考えられないような時間、9時頃に眠りに付き、目覚めて寝袋を置んだ時間は朝の7時、これだけぐっすり眠れたら今日も快適、身体がぼんやりしなくて済む、夜中に何度も起きて小便の為に外に出ていく事を繰り返すと、翌日の身体はだるく動きも鈍い。山ではゆったり睡眠が大事、眠れないと本当に辛い、なんて若いころには想像もできなかった悩み、眠れないのは山だけでなく、普段の日々も同じ事で5、6時間の睡眠時間で目が冴えてしまってもう眠れない時、なかなか寝付かれず時計を気にしながらモンモンとする時、何度も目が覚めてその都度少便に行きたくなって朝が来てしまった時、そういう時は良くないね、それこそ若い頃には考えられなかった。そういえば寝るのが下手な人生だった、酒を飲むようになってからは“バタンキュー”は当たり前だったが、何時間も布団の上で時間を過ごしていた記憶が甦る、最近も酒を控えた日、明日は早く起きないといけない日にはこの記憶が甦るようになってきた、と余談はさて置き山の話へ。

スキの穂あちこちに生い茂って上を向いている、向こうの山は黒っぽい緑で杉が植林された山、こちらの山は紅葉といってもほとんどが黄色い木々の集まり、霧のかかる山々は黒っぽい針葉樹林の山の方が幻想的な、水墨画的な、幽玄の世界を醸し出す、表現している。グレー色に見える木々の山肌が近くにあるほど黒っぽく見え、遠くに離れるほどに色が浅くなっていく、そのそれぞれの間に白い霧がフワリと懸りこれこそ中国や韓国や日本の風景、古典の絵に描かれた山水の世界とその美しさにはオレも文句なし、この辺りの峠は霧の名所、雲海の名所、写真愛好家がよく撮りに来るそうだ。

何時ものように我が“檻樓くん”を取り出してあちこちに置いてみる。地面もたっぷり湿っている、切り株が積み上げられたその上も水がたっぷり、長い間積み上げられたままに棄て置かれた太い切り株はまだ腐りはしないが色も黒ずみ水で光っている。その表面によく見ると菌糸のようなひよろりとした植物が無数に生えている、その細い糸のような先っぽにはオレンジ色の花なのか実なのか一つ一つに付いている。じっくり見るとこんな小さな世界にも生きものが生い茂り、生を謳歌している、伸びている、立っている、花をつけている。檻樓くんをそこに置いてオレは悦にいつている。檻樓くんも見得を切っている。その向こうに木立、葉を落とした若々しい木立も枝を力いっぱい伸ばして、これまた見得を切っている。

何度もいうが木が素晴らしい、太い木、デカイ木、自然林の中でいろんな木が勝手放題に曲がりくねって、折れ曲がる、傾く、枝を伸ばす、デカイ幹に大きな穴が開いている奴、太い幹の半分が無くなっている奴、木と木がひっついて「一本の木なのか、それともひっついているだけなのか、どっちかね」と目を疑うような木、親なのか子なのか木の股の途中から木が出ている奴、いろんな木がいろんな不思議な造形を形作っている。洞には誰か居るのか相当奥まで穴が開いて、こちらからは見えない、リスかイタチかキツツキかそれとも熊か。蔦も絡まっている、半端な太さじゃない、オレの腕も負けそうな蔦が絡まっている。冬が近付きデカイ木の本体の葉がみんな落ちてしまった今、デカイ木の枝がたわわに張り出して空をも覆い隠す勢いで葉を茂らしていた、その葉が枯れて落ち葉となった今、鬼の居ぬ間にはないけれど蔦の葉が青々と茂っている。今だ、覆い隠していた葉が落ちてしまった今が「我が世の春」とばかりに繁茂している。実が落ちている、獣たちがセッセ啄ばみ食ったのか中味が無くなった実、中味の詰まった物も落ちている、獣たちの世界は豊作なのだ、余っているのだ。風にでも吹かれたのか枝が折れて地面に転がっている。間もなく寿命が尽きそうな大木がある、彼の幹は黒く汚く薄汚れあちらこちらにキノコが生え、根のあたりは緑色の苔がむし、枝が折れ、少ない葉も枯れ落ちている。

斜めから射す赤く暖かい陽の光に照らし出された木々が目に焼きついた山だった。

展覧会の日を決めた、来年の三月、終わりの週に決めた、24日から29日に決めた。今年は展覧会の案内状を大量に同封してくれる処が、12月中旬に封筒詰めをするというので早速画廊に連絡をして日を決め、時間が無いと慌てて案内状の原稿を考えている。展覧会の案内状はいつも葉書サイズと決めている、と言えども聞こえがいいが、それ以上の大きな物“封筒サイズ”“A4チラシサイズ”を作ると、案内状自体にまた郵送費に多少金がかかる、その多少が常に引っかかって慎まじやかに過ごしているわけだと開き直る。まず切手面は例年通りの仕様、日時だけを変えれば去年の物をそのまま使用できる、文言は“5W1H”ではないけれど Who（誰が） What（何を） When（いつ） Where（どこで） Why（なぜ） How（どのように） というような事が抜け落ちると大変、とは言えこれを改めて読んでみると何故（Why）とどのように（How）は、こと展覧会の案内状としては意味深い文言が浮かび上がってくるのだが、なにぶんにも小さい紙面に老眼がどんどん進んでいる友人たちの目の事を心配すれば、極小の字体を使用するわけにもいかず、1行か2行の簡単コメントしか載せられない、で色々推敲した結果このように書いた。「オレの絵は 氣力と感性さえあれば いくつになっても 描ける 創れる といいつつ ゆっくりやっております 観に来て下さい」

例年1000円会費パーティをやっているのですよ、ところが今年は食べる物を用意する手がない、当日に何かおいしい物を買ってこなければならぬ手がない、オレの手が空いていればそこらあたりのスーパーマーケットやら市場で旨そうな物をなんとか揃える事ぐらい朝飯前と思っているが、展覧会の主が中座する訳にもいかず、今年は諦めよう、パーティはできないと思っていたら、近所のW氏「買い物ぐらい行っただけよ」と気軽に言ってくれたのには有難く助けてもらう事にした、というわけでその事も1行追加した「お気軽に、どうぞ」ですぞ、来て下さい。

案内状の絵の面、絵の画像をどうしようかと考え、何時もの定点観測、時々気が向けばアトリエの壁を撮影している、それを定点観測と呼んでいる、その写真を使うことに決めた。普段に日常、今日はここまでと絵の事を忘れ去って壁に掛けて去る、振り返らないただの壁、そこに掛けられた描きかけの絵は無情、無機、何枚か撮影を終えて「配置は如何」「色の並び具合は如何」とあれやこれやを選び「少し赤が出過ぎている」とか、「画面と画面の間の隙間が狭い」とか「もう少し欲しい」とか、最初は「これはつまらない」と横に除けていた1枚をもう一度つまみ出し、結局これだと決まるまでぐずぐず逡巡すること数時間、作ってみると可もなく不可もなく、それなりに爽やかで静かで気張っていないとオレ自身がいきるまでにはいかないが、とにかく出来上がった、後はそれを印刷屋に発注するばかり。今、又、実験的な絵を、描き方を試みている「いまどき、なんだ、大器晩成といえども、遅すぎる、まして実験」となるほどさすがに歳だけれど、重ねて来た年輪、なにか“ピリリ”と感じる味を解明できた、今度こそ間違いのないとまでは言わないけれど、残念だけれどもこれは面白い実験なのだ。この実験、いくつかを重ねて「なるほどこれならいい」というやつが先日一つ出来あがった。2,3年前から始めているこの実験、最初は白いキャンバスに緑色の絵の具で太い刷毛のような筆を持っていつもの“わたしはわたし”を描いて次は何処に筆を入れようかと思いつつ壁に掛けていたのを見て「これが欲しい」「これはまだ未完成、まだまだこれから筆を・・・」「いやこれだ」と金を置いて帰った御仁がいた。後日「気にいっている」「〇〇さんも良いと言っている」とそんな話を聞いてオレ自身が「なんで・・・？」と気持ちも揺れ「あれがいいのか・・・」「あんな物でいいのか・・・」というような事があって、描いても描いても出来あがらない絵を白の絵の具で塗り潰し、黒の絵の具で塗り潰し、その上から前と同じ調子で太い筆にたっぷり絵の具を含ませて画面の上を走らせた、画面を撫でてみた「これはいい」「これならいい」という感触がいくつかでき「これはすごくいい」「これかも・・・」という一枚を去年の展覧会に出してみた。評判が良かったと安堵しつつもアトリエに籠り始めるといつものように絵描き生活に入り始めると又々以前のように、泥んこ遊びをしている自分が居てそれをなじる自分が居て、そんな泥んこの絵を白い絵の具黒い絵の具で塗り潰し“わたしはわたし”を描いている。そして今オレは悦に入っている状態なのです。ま、観て下さいよ、観に来て下さい。コーヒーをいれますよ。